
ある夏休みに響いたソナタとその残響

佐遊樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある夏休みに響いたソナタとその残響

【Nコード】

N7303I

【作者名】

佐遊樹

【あらすじ】

少年は、そのソナタを黙って聴く。

少女は、そのソナタを黙って弾く。

残響はいつまでも残り、少年は立ち去る。

そんなお話。

夏休み。

一般的な学生なら長い休暇に狂喜乱舞するところだが、俺もその例に漏れず興奮していた。

といつても、理由は休みだから、というよりは夏だから、である。なぜなら。

夏は、実家に帰省できるのだから。

ある夏休みに響いたソナタとその残響

俺の実家は、内陸の奥地、大きな山脈に四方を囲まれた盆地にある。

ビルなどなく、見渡す限りの田んぼ。

川からは用水が引かれ、もう日本屈指のド田舎である。

「さて、ようやく帰ってきたか」

古ぼけた路面電車を降り、田舎道を歩くこと約15分。炎天下の中を歩いたのにもかかわらず、俺の気分はウキウキだった。

「おい、じいちゃんいるかあ？」

ドアをドンドンと叩くが、返事はない。

仕方ない、どこかその辺でも散歩するか。

幸いなことに、目的地ははっきりと見えていた。

この田舎の中で唯一近代的な建物。

中の講堂には立派なグランドピアノが置いてあり、よくあいつが演奏していた。

確かあいつがよく演奏していたのは、シューベルトの『ピアノソナタ第16番』だったか。

その建物が近づいたとき、俺の鼓動は早まってく。
俺は、あいつに再会するためにここまでやってきたのだから。

講堂に入った時、俺を出迎えたのは冷たい沈黙だった。

今日は、来てないのかな。

俺は仕方なく講堂に入り、ピアノに手を置いた。

このピアノには、あいつのぬくもりが残されているのかもしれない。

そう考えると、このピアノもお持ち帰りしたいぐらいだが残念なことに俺の家はそんなに広くない。

さて、今からどうしようか。

.....

こうしていると、沈黙がいよいよ不気味さを帯びてきた。

ちよつと、怖い。

こんな時に突然ピアノが鳴り響いたりしたら、俺は失神してしまうかもしれない。

そう思っていた時、ピアノが鳴り響いた。

「うひゃあっ!？」

突然の出来事に、俺の体が思わずはねる。

「な、なんだ、居たのかよ」

ピアノのほうに視線を向け

俺の眼球は、ピアノを弾く一人の少女の姿を視認した。

「久しぶりだな、あかり」

彼女の名を呼ぶ。彼女は黙ってピアノを弾き続ける。

シューベルトの『ピアノソナタ第16番』。シューベルトの12年という短い創作人生の中で、数少ない完成作。

長短調が混在するその曲調は、『片目で笑い片目で泣いている』と評されている。

「……久しぶり」

と、ピアノの鍵盤から視線を外さず、彼女は口を開いた。

「元気だったか？」

「……毎日、これを弾いていた」

よく、飽きもしないで続けられる。

「ほら、お前のために弁当作ってきたんだぞ」

その言葉に、ピアノソナタはピタツと止んだ。

「……本当？」

「ああ。お前の好きなタコさんウィンナーも入ってる」

「……いただきます」

昼食にはちよつと遅い時刻だったが、それでも充分楽しかった。

日が沈み、家に戻ると、じいちゃんはもう戻ってきていた。

「あきら、久しぶりじゃのう。あっちでの生活はどうじゃ？」

「毎日退屈だよ。いっそのことこっちに引越してこようか」

俺の言葉に、じいちゃんは口に含んでいたご飯粒を噴き出した。

「冗談だよ、まだ俺はあっちでやりたいことがある」

そうかそうか、とじいちゃんは頷いた。

次の日も俺は、講堂を訪れていた。

講堂の空気は、いつも涼しい。

今日もここには、『ピアノソナタ第16番』が流れている。

「あかり、お前本を読んだりするか？」

「……星の王子様」

俺はお茶を盛大に噴き出した。

「……バカにしないで」

「わ、悪かったよ」

拗ねたように俺をにらむあかり。

「……ホント、変わってねえな」

俺の言葉に、あかりの演奏が止まった。

「…………何が？」

あかりは呟く。

「…………何が変わってないの？」

「そうだな、きつと…………全部、かな」

俺は考えながら、そう言った。

「…………あなたも、変わっていない」

その言葉に、俺はギョツツとする。

「冗談」

そう言って笑う彼女の笑顔は、眩しかった。

帰って、試しに料理を作ってみた。

じいちゃんの手料理は、いつもうまい。

ばあちゃんの手料理も、いつもうまい。

「あきら、こんなんじゃ人の食べた料理にゃなんないよ」

「ばあちゃんがうますぎるんだよ」

そう言って俺は、自分の作った卵焼きを口に含む。

砂糖を入れたはずなのに、苦かった。

「…………卵焼き、おいしい」

今日は、『ピアノソナタ16番』は聞こえてこない。

俺とあかりは、講堂で昼食をとっていた。もはや日課だ。

「そうかい、それじゃあ俺も」

俺は自分で作った卵焼きを食べる。なぜか、辛い。

「…………とってもおいしそう」

弁当に入っているのは、黒焦げの卵焼きにおかゆ状態のご飯。みじん切りのように細かくされたウインナーと真っ二つに折れた爪楊枝。

「…………私なんかのために、お弁当を作ってくれてありがとう」

「どういたしまして。さあ、早く食おうぜ」

俺は、全く減らない弁当相手に格闘を始めた。

半分にしか減っていない弁当を持って、家に帰る。もう辺りは真つ暗だ。

じいちゃんとはあちゃんは俺を見ると、ふふつと笑った。

「ほおらこれ、あきらが小さいころの写真よ」

「アルバムかあ。ばあちゃん、こんなのだっから引っ張り出してきたんだよ」

俺は苦笑しながら、アルバムを覗き込む。

幼稚園のころ　紅白帽を頭につけ、光の巨人のように腕をL字型に組む俺。

小学校のころ　かけっこでゴール直前にこけて、ビリに転落した俺。

アルバムには、幼稚園と小学校のころしかない。

俺は都会で生まれ、そしてこの田舎に母さんとともに移り住み、母さんが再婚した時都会に戻った。都会に戻ったのは、中学に入る前だったと思う。

「にしても、あんたいつつもあの子と一緒にいたねえ」

「そう、あの可愛い女の子……」

じいちゃんとはあちゃんは顔を見合わせ、「うーん」と唸り始めた。俺はすかさず助け舟を出す。

「あかり、だろ？」

「そうじゃ、北原さんとこのお嬢ちゃん」

「そうね、確かにあかりちゃんだわ」

俺は苦笑いを浮かべる。……知らず知らずの間に、拳を握る。

拳を開いてみると、爪が食い込んだのか、掌に三日月の跡がくつきりと残っていた。

朝、俺は早めに起きてあかりのために弁当を作る。

フライパンに油を薄く引き、卵を焼く　焦げた。ちよつとひっくり返すのが遅かったのだろうか。

ウィンナーを切る 勢いあまって、余計なところまで切ってしまった。見栄えが悪いので、切り刻んで炒める。焦げた。炊飯器の中を覗き込む また、ドロドロだった。水が多すぎたのかな。

「ま、代わりもないしこれでいいか」

こうしてできた弁当は、あとは盛り付けるだけ。

爪楊枝をウィンナーの残骸に添えようとして 爪楊枝に、水が滴り落ちた。

俺の涙だった。

その時限りの激情に身を任せ、爪楊枝を叩き折る。

誰だ、俺をこんな風にしたのは。

「俺は今日、都会に帰る」

「……寂しくなる」

「ピアノがあるだろう」

「……人と喋っていたい」

「だったら、俺がこっちに引っ越してやろうか？」

「……あきらかに迷惑がかかる」

「そうか」

「……そう」

「ところで、弁当うまかったか？」

「……うん、とってもおいしかった」

「あかり。本当のことを、言ってくれ」

「……」

「頼む。俺は、もう、現実から目を背けたくない」

「……ごめん、なさい」

「本当は、何も分らないんだろ？」

「……ごめん、なさい」

「本当は、味も何も感じないんだろ？」

「……ごめんなさい」

「本当は、何の香りも感じてないんだろ？」

「……ごめんなさい……ごめんなさい」

「本当は、自分が『あかり』だってことも、俺が『あきら』だってことも分からないんだろ？」

そう言った瞬間、あかりは足元から光の砂粒となって空気に溶けた。

何の感慨も何の傷も残さず消えていった。

あかりは、死んでいた。

そんなこと、とつくの昔に知ってる。

彼女は小学校5年のころ、自動車事故で死んでるんだ。

そう、彼女は死んでいる。

死んでいるんだ。

そして翌年の夏、俺はピアノを弾く彼女と出会った。

彼女は幽霊だった。

嗅覚も味覚もない。かろうじて視覚と聴覚と触覚が残っているだけ。

毎年の夏、講堂に訪れては生前彼女が好きだった『ピアノソナタ16番』を弾いて帰る。

それを繰り返すだけの、亡霊。

自分が誰なのかも分からず、ピアノを弾き、俺と話すだけの、亡霊。

俺は彼女が好きだった。

死ぬ前も、死んだ後も。

だから俺は彼女の傍にいた。

けれど、それももうおしまいだ。

完全に閉まりきった電車のドアに身を預け、外の光景を見る。
広がる田んぼ。

その中にポツンとたたずんでいた、近代的な建物。
時代とともに風化し、廃墟と化したその建物には、なぜか一つの
グランドピアノが置いてある。

まるで、誰かが弾きに来るために用意されているかのように。
耳元で、ピアノソナタが響く。

それが俺の耳に残った残響だと気づいたのは、電車を降りてから
だった。

(後書き)

よくある、「実は幽霊でした」というパターンです。
ベタなのもベタなりに、グッと来るものがある。
そう思いませんか？

では、感想・評価お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7303i/>

ある夏休みに響いたソナタとその残響

2010年10月8日15時02分発行